岩手の生涯学習物語（展開期編）

第十二話　「学びの体験記」の巻

元岩手県教育委員会事務局社会教育課長　　高　橋　　寛

「平成元年は生涯学習元年」のキャッチフレーズで始まった岩手の生涯学習、前回の「県民のつどい」に続いて今回は「学びの体験記」のお話です。

「県民の集い」、三つの内容

「いま広がる、岩手の生涯学習～人生 80 年代、生きがいの創造」をテーマに、平成元年に始まった生涯学習推進「県民のつどい」は三つのことを内容とするものでした。

第一は県民の生涯学習成果の発表の場としての「県民のつどい」、第二は学習成果の記録としての「学びの体験記」入賞者の表彰と体験記の発刊、そして第三は今後の生涯学習推進を考える「シンポジュウム」と中央講師による「講演」です。

「学びの体験記」

その第二の「学びの体験記」は市町村教育委員会が公募し､第一次審査として各教育事務所が 3 編を推薦、中央審査により最優秀賞 1 編、優秀賞 3 編、佳作 6 編を入選作とし県民のつどいで表彰すると共に、推薦作品 33 編を「学びの体験記、生きがいの発見と創造」として発刊し、県内の図書館をはじめ関係機関団体に配布するというものでした。

第一回の学びの体験記は応募総数 112 編、その中から最優秀賞 1、優秀賞 3、佳作 7 編が選ばれ、「県民の集い」の場で県教育長から表彰状とともに表彰楯が贈られました。

「学びの会」誕生

学びの体験記第 1 号と表彰

この「学びの体験記」の事業から一つのサークルが誕生しました。「岩手マナビィ会」です。第一回学びの体験記入賞者が県民のつどい終了後話合い、発足させたものです。次年度以降の入賞者を会員とし年 1～2 回入賞者の地元を会場につどい、観光しながら交流を深め、岩手の生涯学習の推進に協力しようとするものです。

事実、このサークルのメンバーはその後の県民の集いに積極的に参加するとともに、教育事務所や市町村の要請に応え、地元の生涯学習推進に協力を惜しみませんでした。しかも、その活動が平成 23 年まで 23 年間も続いていたのは驚きです。

「学びの体験記」余談

第二回学びの体験記表彰でこんなことがありました。受付を担当していた岩手紫波教育事務所、佐々木洋子社教主事が私に話してくれたものです。

受付に一人のお婆さんがやってきました。さっぱりとした服装に緑の唐草模様の風呂敷を袈裟懸けにしています。その人は体験記の入賞者の山形村、山崎ノブさんでした。

いよいよ表彰式、ノブさんはその姿で壇上に進みます。佐々木社教主事が「山崎さん、よろしかったら、その肩の風呂敷をお預かりしましょうか」と話しました。答えは「ようがんすの、お爺ちゃんと一緒に表彰を受けますから」とのこと。

実はお婆ちゃんの体験記にはこんな歴史があったのです。ある年のこと、一組の老夫婦が岩手大学農学部、晴山信一教授の研究室を訪れ話しました。「先生、これは稲キビの種です。昔から体にいいと言われてきました。本当でしょうか。調べてくれませんか」。晴山教授の答えは昔の言い伝えのとおりでした。

自信を得た山崎さん夫婦は稲キビを栽培し、自らの食卓を飾り、他人にも勧め喜ばれました。その体験を「農に生きる～稲キビとの出会い」としてまとめ応募し入賞の栄誉に輝いたのでした。

しかし、共に苦労し働いたお爺ちゃんは三年前に旅立っていたのです。ノブさんは唐草模様の風呂敷の中にいるお位牌のお爺ちゃんとともに、万感の思いで壇上に立ち表彰を受けていたのです。・・・・・嗚呼。